

月刊 **みんぱく**

1月号

2025



特集 「お供え」する人

巻頭エッセイ 野村 進

湧水あふれる島

野村 進のむらすすむ

ノンフィクションライター
拓殖大学国際学部教授

南

の島に着くと、かならず体に変化が起きる。なに、たいしたことではない。肩や背中このわばりが、ゆるゆるとほどけていく気がするのだ。

東京で知らず知らずのうちに、身構えて生きているのかもしれない。最近訪ねた奄美群島の沖永良部島でも、小型機から降り立つとすぐ、全身に心地よい脱力感が広がった。

沖永良部島には、かつての教え子と、知り合ってもない同世代の知人がある。ふたりにまず会いたいと思った。それから、南国の植生が大好きなので、南の森をゆっくりと散策したかった。

周知のとおり、南西諸島のはとんどの島には、猛毒を持つハブがいる。私は、南の鬱蒼たる森林で、人間より上位に位置するハブに畏敬の念を抱いてきたが、毒蛇におびえながら森を歩きたくはない。沖永良部は太古の海没と隆起によって、南西諸島では珍しくハブが生息していない島なのである。

この島で私は南の森を久々に堪能したのだが、新鮮な驚きを感じたのは人々の暮らしぶりだった。

いたるところに水場がある。近所の人々が湧水で野菜を洗ったり、子どもたちがプール代わりに水遊びをしたりしている。むかしは沐浴場でもあったそうだが、端のほうには役牛に水浴びをさせてやった場所もあり、手綱をつなぎとめた跡が残っている。

島は地下水に恵まれ、鍾乳洞は世界でも屈指の美

しさを誇る。地下にある水場も多く、「暗川（クラゴ）」と呼ばれている。

水場は、いまま地元の社交場だ。お年寄りたちが、私には聞き取れない方言で談笑している。そばでは子どもらが水を掛けあい、歓声をあげている。小さな滝がある水源には、控えめな虹がかかったりした。

私は、バリ島かどこかの水場にいるような気がしてきた。不思議なことに、「懐かしさ」と「新しさ」の両方を感じていた。

島には、北と南に小さな街がある。ふたつの街を中心にして、北側には薩摩の文化が、南側には琉球の文化がそれぞれ根づき、人々の気質も微妙に異なるという。島で働くフィリピン人女性数人にも出会った。タガログ語で話しかけると、みなニコニコ顔になった。

私は、これから何度も、この島に通いそうな予感がある。



沖永良部島・瀬利覚（せりかく）の水場
（鹿児島県、2023年、神川亜弓さん撮影）

プロフィール

1956年東京都生まれ。78～80年、フィリピンに留学。主著に『コリアン世界の旅』（大宅壮一ノンフィクション賞、講談社ノンフィクション賞）、「アジア 新しい物語」（アジア・太平洋賞）、「日本領サイパン島の一日」、「千年、働いてきました」など。最新刊は『丹波哲郎 見事な生涯』（講談社）。

月刊 みんなの島 2024年12月号

表紙

人間の首の代わりに、人物をあらわした土偶や土器から頭部のみを取ったお供えすることもあったようだ（ペルー アヤクチョ、2022年、ユリ・カベロ撮影）

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ
湧水あふれる島
野村 進

特集「お供え」する人

- 2 「お供え」ってなんだろう？
松本 雄一
- 4 シュエダゴン・パゴダ、金色の輝き
藏本 龍介
- 6 村でアカの家族が供犠をやめたのは
清水 郁郎
- 8 「無形の供物」としての芸能
神野 知恵
- 8 「死んだら無になる」？
金 セツピョル
- 10 生け贄の缶詰
足立 真理
- 11 お供えの誕生
池谷 和信

- 12 みんなく回覧板
- 14 推しコレ図鑑
鳥の女
木場 貴俊
- 16 ふらりミュージアム
ヨコタ博物館
中村 真里絵
- 17 世界の「乗っちゃえ！」
自転車か刻むケニアのリズム
萩原 卓也
- 18 だって調査だもの
ユニフォーム効果
稲澤 努
- 20 ばくっ！とフィルめし
行く国々で「肝だメシ」
キャサリン・パトラー
- 21 今月号の地図・編集後記

「お供え」する人

神社でも、お寺でも、家庭でも
正月に「お供え」はあたりまえ
でも、なぜ？ そもそも人はお供えを
いつ始めたのだろう？
そして、なぜなくなるのだろう？
信心とは別のところから
お供えの現実が見えてくる……



正月棚（愛媛県、H0037023、日本の文化展示）
新しい箕（み）にシダをしき、お盆を置く。餅、ミカン、串柿、田作り、お神酒、ご飯、味噌汁、箸、ロウソクをふたつずつのせる。これを恵方の方向に天井から吊るす

「お供え」ってなんだろう？

「何か」に願いを

みなさんは正月のお供えひとつひとつの意味をご存じだろうか。

なにが正解かはさておき、それぞれをちゃんと答えられる人は少ないだろう。意味なんてことは考えず、慣習として続けているのがふつうなのだ。

それにしても「お供え」ってなんだろう。本来、目に見えない、あるいは不在の「何か」に対して捧げられるモノのことだ。言い方を変えれば、お供えはその「何か」に、願いや思いを伝えてくれるメディアである。しかし続けていくうちに、いつしかそこに込められる願いや思いが忘れられたり、また「何か」もあいまいになったりしていることがある。そうなくても、なぜなくならない「お供え」がたくさんあるのだろう。もしかすると、ただの慣習に堕したお供えの事例のなかに、それを続けているわれ

と考えられる。

そして筆者の調査では、このイベントで使われた食器や道具があらたな神殿に埋め込まれていたことが分かったのだ。「そこで、聖なる儀礼で用いたものを奉納物（お供え）として神殿の一部とすることに意味があった」という解釈を論文では提示したのだが、よく考えると「片づけるのが面倒だから、お供えということにして埋めちゃった」なんてのがホンネだったりしないだろうか。ちょっと怖くなってきた。考古学ではそういうことは言わないのが暗黙の了解のような気がするからだ。実際に古代人によるお供えの現場を観察することはできないし、古代人にホンネを聞いて確認することもできない。

ホンネを探ってみよう

また現代に戻ってきて、わたしたちの身の回りのお供えについて考えてみよう。いったいどのようなお供えが、どのように形を変え生き延びている、あるいは新しく生まれているのだろうか。近年の社会におけるデジタル化の波が、お供えという行為にどのような影響を与えているかも気になるところである。現代において「何か」に「捧げる」というお供え本来の意味はどのような

まつもと ゆういち
松本 雄一

民博
准教授



紀元前2800年ころの儀礼場から、丁寧に掘り込まれた土坑が確認され、その中には頭蓋骨が2つ並んで納められていた。これもお供えと解釈できるかもしれない（ペルー アヤクチョ、2013年）



左：石のお供え？ 3000年前のアンデス高地の神殿で確認された遺構。赤い石が丁寧に掘られた穴の中におさめられている。筆者はお供え（奉納物）と解釈したが、何かに使ったあまりの石を埋めただけ、なんて可能性も……

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

われ側の事情、いわば「ホンネ」が隠れているのかもしれない。例えば仏壇へのお供えを買うとき、価格であったり、「御下がり」を食べる家族の人数や好みだったりを考えたりしないだろうか。

ホントに聖なるお供え？

筆者はアンデス考古学を専門としており、今から三〇〇〇年前に栄えた神殿で発掘調査をおこなっている。神殿からはさまざまな捧げもの、すなわちお供えが出土する。動物の骨からわざと壊された土器、人間の頭骨、遠くから運ばれてきた希少な石までの様態はさまざまである。豊かな装飾品を身に着けた人物の埋葬とて、神殿においてはお供えとみなすことも可能であろう。

しかしあるときふと感じた。われわれ考古学者はこれらのお供えに過剰に意味を付与しすぎてはいないだろうか、古代の人物とをあまりに敬虔な宗教人として描きすぎてはいないだろうか。古代アンデスの神殿では、あらたな神殿を建造する際に劇場型の儀礼と宴会がおこなわれたことが知られている。幻覚剤を用いて華やかな装身具を身にまとった神官が中心となり、多くの聴衆が広場に集まる重要なイベントであった

に変化したのか。そして、それはホンネとどんな関係にあるのか。

こう考えてみると、「お供え」のホンネを探ることは、その行為を続けるわれわれ自身を探ること。「タテマエ」としてのお供えの意味よりも、それを実践する人の生き方の意味を知ることである。各地の社会に密着し、聞き取りと行為の分析のどちらも扱っている人類学者たちの声に耳を傾けてみよう。

チャビン・デ・ワンタル遺跡。中央アンデスにおいて紀元前1000～500年ころに巡礼地として栄えた神殿。遠隔地から人びとは奉納物（お供え）をもって訪れた（ペルー、2019年、ジェイソン・ネスビット撮影）





僧院での布施儀礼の様子(2008年)

して善行のなかでもっとも一般的なものが布施、つまり自分のもっているヒト(勞力・モノ・カネを、他者に提供するという行為である。大切な何かを手放すことは、同時に自分の心を執着や欲望から解き放つことになる。こうした執着から離れた心の状態を功德といい、この功德が善業(善因)となり善果(良い転生や悟り)をもたらすとされる。

ただし実際の布施の動機は多様である。例えば『パーリ仏典』(經藏・増支部)の記述では、仏法僧への尊敬、返礼(功德)の期待、自分の名声の上昇、他人からの非難の回避といった動機が挙げられている。あるいは特に強い動機がなく、なかば慣習的におこなわれている側面もある。その一方で、

熱心に布施をしている人たちはじつに生き生きしている。その姿を見ると、人間は「もろうこと」よりも「与えること」の方が好きなのではないかという気がしてくる。自分のもっている資源を通じて他者に貢献すること。そこにわたしたちの大きな喜びがあるのだろう。

功德一〇倍のすすめ

仏教徒の布施はこれまで、仏法僧に集中する傾向にあった。仏法僧こそが、布施をもっとも功德ある善行へと変えてくれる存在(実り多い福田)であるとしてされてきたからである。しかし二〇〇〇年代以降、布施の流れは仏法僧から社会的弱者(障害者、老人、病人、子ども、被災者など)へと広がっている。例えば葬式支援協会では、貧しい人びとの葬儀を手助けすることが、僧院に布施するよりも一〇倍の功德があることを喧伝し、昨今の福祉(パラヒタ)ブームを牽引している。

二〇二一年の国軍によるクーデター以降も、草の根レベルの布施ネットワークが市民の生活を支えている。仏法僧を核として培われてきた布施の循環(布施経済制度)は、形を変えながらミャンマー社会の基礎となっている。

シュエダゴン・パゴダ、金色の輝き

蔵本龍介 くらもと りょうすけ
東京大学 准教授



ミャンマーの国家予算の数十年分

ミャンマー最大の聖地であるシュエダゴン・パゴダは、金色に輝いている。その頂点には七六カラットのダイヤモンドを筆頭に、数千個の宝石(ダイヤモンド、ルビー、サファイアなど)が埋め込まれている。一説によると、シュエダゴン・パゴダにはミャンマーの国家予算の数十年分を賄えるだけの財が結集している。これはすべて一般の仏教徒からの布施によるものである。

ミャンマー仏教の世界では、「お供え」は布施という形であらわれる。人生儀礼(誕生、結婚、死去など)や年中儀礼(新年、雨安居前後など)、厄除け・願掛けなど、ありとあらゆる機会にパゴダ(仏塔)や出家者に布施をする。年収を上回る額を布施することもめずらしくない。

布施への熱意

なぜミャンマー仏教徒はこれほどまでに布施に熱心なのだろうか。その背景にあるのは「輪廻転生」「業」「功德」といった仏教的な世界観である。仏教徒の実践の要は、善行によって功德を積み、自分の業を善くすること、それによって輪廻転生のなかで良い生まれ変わりを果たすことにある。そ



右:パゴダでの布施の様子。お金を投げて入れれば願いが叶う(2007年)
左:洪水被災地への支援物資を準備する葬式支援協会の人びと(2020年)



上:シュエダゴン・パゴダの輝き(2020年)(写真はすべてミャンマー ヤンゴン)

村でアカの家族が供犠をやめたのは

清水 郁郎 しみず いくらう 芝浦工業大学 教授

とにかく多い供犠

北タイの山地に住むアカの村で調査をしていた一九九七年当時、村の人びとにとって、年に一二回の祖先祭祀は単に祖先を敬うだけでなく、農耕や狩猟などの生業の過程とかかわる重要な機会でもあった。祭祀祭礼には必ず動物の供犠が伴う。動物を殺して祖先の霊にお供えするのである。

村の全世帯で新米の収穫が終わって一カ月半から二カ月ほど後におこなわれる新年の祭ガタン。その初日「水牛の日」には、各世帯で祖先祭祀がおこなわれた。この祭を過ぎると「村や家にいる時間」すなわち農閑期がはじまり、家の改修や新築、結婚式が頻繁におこなわれるようになる。それからほぼ二カ月後には、狩猟で獲物がたくさん獲れるように願うフナムシユイの祭があり、その初日には、やはり、各世帯で祖先祭祀がおこなわれるという具合である。

供犠される動物

祖先祭祀や祭礼ばかりでなく、アカの村ではほぼ毎日、どこかの家で病氣治療や厄払いがおこなわれていた。動物が供犠され、病氣治療であれば病氣を治す託宣を与えてくれる祖霊に捧げられた。厄払いであれば、人に取り憑いた精霊に人間の魂を取る代わりに動物を持っていくよう交渉がおこなわれた。

供犠される動物は、その体毛の色や雌雄、ニワトリであれば成鳥か幼鳥などが儀礼ごとに決められている。稲の播種前に必要な「水場を清める儀礼」では、ニワトリは羽毛が茶色の「清浄なニワトリ」で、雌雄一対であることが必須である。稲の播種の初日におこなわれる祖先祭祀では、ニワトリは雄でも雌でもよいが幼鳥が必要である。村全体が災厄にみまわれたときにおこなわれる大掛かりな厄払いでは、雄の

白いニワトリ、雌の茶色いニワトリ、雌の黒いニワトリ、茶色のイヌに加えて、若い雄のヤギと雄のブタ各一頭が供犠される。三羽のニワトリはいずれも幼鳥でなければならない。徐々にブタが小さくなって……、そして改宗へ

ニワトリからスイギュウまで、供犠される動物は、儀礼や役職によってはたいへんな数である。その負担は世帯に重くのしかかる。村の儀礼的指導者の男性は、自らが主催する儀礼を年に三回おこなわなければならない。当日の朝にブタを一頭供犠し、儀礼後に老人たちを自宅に招いて酒食をふるまう習慣であった。

わたしが調査していた村で儀礼の指導者だった男性の場合、当時一〇歳ほどの長女を筆頭に数人の幼児を抱えていた。この男性のように比較的若い夫婦と数人の幼児だけの世帯は、労働の担い手が少ないために経済的に苦しいことが多々ある。供犠するブタは徐々に小



家に入ったよくない霊を追い出す儀礼では、霊の接近を感じることができるイヌが供犠される(1998年)

さくなり、ついには子ブタを供犠するに至った。五〇〇バーツ前後(日本円で約一六〇〇円)で購入したもののだが、男性には大勢の老人たちをもてなすに足る三〇〇〇バーツ(約九六〇〇円)前後の中型のブタを購入する資金力はすでになかった。

では最終的にどうなるのか。多くの世帯が動物供犠を必要としないキリスト教などに改宗するのである。北タイの山地では、一九六〇年ころからキリスト教の関係団体が活発に布教活動をしてきたが、山地民のキリスト教への改宗理由は、このようにしなれば伝統を維持するための経済負担が大きいことだった。

ところでアカの人びとは、加護や病氣治療を期待して動物を供犠し、祖先にお供えしてきた。よくない霊に對しては、供物は人間の命と引き換えるためだった。葬式では、供犠されたスイギュウは冥界への旅をする死者の旅の途上の食物だった。改宗とは、単に信仰する対象を変えるというだけでなく、祖霊から悪霊まで



観光向けのブランコ祭の告知。稲の豊作を祈るブランコ祭では、雨期の最中に巨大なブランコに女性がり、空に向かって高くこく。祖先祭祀を伴う儀礼だが、現在では観光客向けにおこなわれることが多い(2024年)

が存在するこうした世界そのものを捨てる(世界の見方を変える)ことである。キリスト教への改宗では祖先を祀る祭壇を家から捨てるが、それをした後の世界には、すでに恐ろしい霊も祖霊もいない。

今日、ほとんどのアカの村が祖先祭祀と精霊祭祀を捨てたが、今年八月に久しぶりにアカの村に行ったとき、少数の村では、一二回は無理だがいちばん大事な三回の祖先祭祀、すなわち新年の祭、大猟祈願、雨季の最中のブランコ祭をおこなっていると聞いた。そのとき、はたして動物は供犠されるのだろうか。次回現地に行くときに確かめてきたい。



人が亡くなると、その魂は祖先のいる冥界に旅する。まじない師はその長い道行を数晩かけて唱えて死者に教える。その道中の食物としてスイギュウが供犠される(1997年)(写真はすべてタイ チェンライ)

「無形の供物」としての芸能

かみのちえ
神野知恵 岩手大学 准教授

死者を弔う「念仏剣舞」

現代日本で、目に見えない存在に芸能を「捧げる」文化が色濃く残っているのは、死者供養の芸能だろう。東北地方では、今も盆の時期に家々を訪ねて演じられる芸能が数多く見られる。

岩手県大船渡市越喜来浦浜の「念仏剣舞」は、盆の時期にその年に亡くなった人を悼むため、家を訪ねて庭先で踊る。この踊りに焼香の動作が取り入れられている点が特徴的だ。踊り手は軒先に用意された位牌と遺影の前で実際に焼香をおこなう。抹香の香りは仏の食べ物とされ、死者や仏に極楽浄土を思わせる良い香りを捧げると同時に、参拝者自身を清める意味があるという。

黒い翁面をかぶった「ササラ」とよばれる踊り手が香炉を高く掲げ、他の踊り手たちの前に進み出る。その周りでは、鬼面をつけた踊り手たちが扇をゆつくりと動かし、煙の揺らぎに呼応する。一人ひとりが立



浦浜念仏剣舞。地域の人びとが待っているので、雨でも剣舞を中止することはない
(岩手県 大船渡市 三陸町越喜来浦浜、2018年)

されたとのことだ。

弔いの芸能はだれのため

「念仏剣舞」や「じゃんがら念仏踊」をはじめ、供養の芸能の目的は亡き人の魂を慰めることだが、家々からいただくお布施が活動資金となっている現実もある。また、終わった後にメンバーで打ち上げをするこ



じゃんがら念仏の盆供養。青年会OBがいる家では家族も一緒に踊った(福島県 いわき市 平下高久馬場、2023年)

とが、行事を支える重要な要素であることも否めない。猛暑のなか、供養を続けるには強いモチベーションが必要なのだ。一方、迎える側も、亡き家族の冥福を祈るだけでなく、自身の心を癒すために芸能を迎え、手厚くもてなしてきた。しかし以前に比べ、お布施の負担や他人を家に呼ぶこ

特集「お供え」する人

一方で、ある家の玄関灯籠には「予約以外のじゃんがら団体はお断り」との貼り紙があった。じゃんがらでは、担い手が地区内の新盆の家と事前に連絡を取り合うのが基本だが、お布施による稼ぎを求めて他地域で飛び込み供養をおこなう例もあるという。以前、複数の団体が一度に押し寄せて混乱したことがあり、その対策として貼り紙が

とに抵抗を感じる人が増えた。その結果、寺や墓地で奉納する形式に移行した芸能も多い。芸能とは、人びとの願いが重層的に反映されて作られる文化である。形骸化や変化が進んでも、根底には人間の想いが残されている。特に死者供養のための芸能は、ホンネとタテマエが交錯しつつも、今も地域文化のなかに息づいているのである。

「死んだら無になる」？

きム
金セツピヨル 総合地球環境学研究所 客員助教

日本でもっとも身近なお供えといえ、やはり仏壇、つまり死者へのお供えであろう。

わたしは一九九〇年ころにあらわれた日本の自然葬(海、山などに散骨する葬法と儀礼)について研究してきた。お墓を作らずに自然葬をおこなう人たちのなかには、お墓だけでなく仏壇を中心とした死者儀礼にも懐疑的な人が多い。

Sさん(一九四三年生まれ、女性)もそのうちの一人であった。夫が長男だったため夫の家の墓と仏壇を継いだ、家制度のな死者祭祀への反感や「死んだら無になる」という死生観から、二人は墓と仏壇は要らないと結論した。彼らは仏壇を解体して粗大ゴミに出した。

しかし夫が亡くなってからSさんが実際にとった行動は、「死んだら無になる」という考えとは矛盾するものであった。リビングの棚の上に、夫の遺影や一握りの遺灰

を飾り、毎日のようにポテトチップスを供えるようになったのである。彼らは夕飯前に夫婦でポテトチップスをつまみながら好きなビールを飲む習慣があったという。

彼女は、本当に「死んだら無になる」と思っているのだろうか。もちろん、生前からの習慣を続けているだけという見方もあるだろう。ただ、「ポテトチップスは時間が経つとふにやふになるし、捨てるときは何しているんだろうと、嫌な気持ちになる」と語る彼女の表情は複雑そうに見えた。いざ大切な人を亡くしたとき、人はどのような行動をとるのだろうか。死者に何を供えるか、または供えないかという問題は、わたしたちに自らの死生観のホンネを突きつけてくる。



海への散骨後、飲み物を供えている
(横須賀港、2010年)

わたしはこれまで、世界中で狩猟採集を
生業とする人びとの暮らしを見てきた。狩
猟文化のなかでも、お供えする文化と、し
ない文化がある。

今から三〇年前、東北マタギのクマ猟に
同行したときであった。マタギは集落周辺
の里山から、山の神の領域である奥山へ入
るときに祈りを捧げる。クマの捕獲に成功し、
解体するときには、山の神に感謝の祈りを
捧げる。さらに集落での年に一度のクマ祭
りでは、山の神にクマの毛皮などを供える。
また、九州地方のイノシシ猟では、捕った
イノシシの頭骨を神に供えたり、大祭で多
くのイノシシの頭が祭壇に並べられたりする。

一方で、アフリカのカラハリ砂漠に生き
るサンの人びとの狩猟では、どうだろうか。
現地にて何度も彼らの猟に同行したが、祈
りや供物を捧げる場面を見たことがない。
唯一、ダイカーなど小型のカモシカ類を狩
る民猟で捕獲がうまくいかにときに、猟

お供えの誕生

池谷 和信 いけや かずのぶ
民博 名誉教授

師がダイカーの毛皮を振って願ったぐらい
である。彼らは、猟の成否を姿の見えない
存在に依存しない現実主義者であるのだ。

人類は、いつからお供えをするようになった
のか。おそらく遊動から定住へとという生
活様式の変化や、農耕の導入と関係してい
るのだろう。マタギの場合は、農耕をする



銀鏡(しろみ)神楽で祭壇にイノシシ頭を供える(宮崎県、上:2012年、下:2013年、鈴木良幸撮影)

定住社会における狩猟であり、彼らは集落
の周辺部の里山と、山の神の領域である奥
山を分けて認知している。奥山は山の神が
支配する領域である。奥山での獲物は、山
の神が慈悲で授けてくれたものという思い
が生まれた。これが、マタギのお供えの誕
生であつたとわたしは考えている。

生け贄の缶詰

足立 真理 あだち まり
立命館大学 日本学術振興会 特別研究員

イスラームでは犠牲祭の日に、神への供
物として肉を捧げる「クルバーン」という
習慣がある。旧
約聖書のアブラ
ハムが息子を神
に捧げる説話が、
クルアーン(コー
ラン)に登場す
ることをご存じ
の方もいるだろ
う。その宗教的
な祭日には盛大
な祝宴を開き、
家族や近隣の貧
しい人びとと食
物を分かち合う。

世界最大のム
スリム人口を有
するインドネシ
アでも、犠牲祭

の日にはヤギやウシが捧げられる。わたし
がいた町では、ウシより安価なヤギが多く、
犠牲祭の一カ月ほど前から空き地に供物と
なるヤギが繋がれていた。当日には寮母さ
んがヤギの脚をスープにして振る舞ってくれ
た。香辛料を多用していたが、野性味のあ
る匂いがし、命を頂いていることを実感す
る日だった。また、近くのモスクでは隣組や
組合でお金を出し合い、ウシが供儀として
用意されていた。神の御名を唱えられ屠殺
される際のもの悲しい鳴き声は忘れられない。

近年、国内第二位のザカート(イスラームの喜捨 管理団体であるルマ・ザカートは、
「缶詰のクルバーン」というプログラムを提
供している。自社農場で育てたウシを自社
工場で缶詰化し、生け贄の代わりにするも
のである。このシステムの画期的な点は、
クルバーン用の肉を缶詰化することで長期
保存が可能となり、犠牲祭で分配された肉
が計画的に消費できるようになったことだ。



寮で振舞われたヤギのスープ(インドネシア、2017年)

近代化と効率化により、犠牲祭の中身も
変容している。都市部では屠殺できる場所
が限られることから、近年ではお金だけ寄
付するという形に変容している地域も多い。
工場で解体され缶詰化された犠牲祭用の肉
は、アッラーへの信仰を示しながら貧しい
人びとへの分配を無駄にすることなく「最
適化」できるといい面もある。しかし
ながら、そこにはあのウシの鳴き声もなく、
ヤギ特有の野性味のある香りもない。「最
適化」の名のもとに、命の大切さと向き合
う行為、そして食べ物を一緒に分かち合う
という慣習としての役割は形骸化してい
くのかもしれない。



ルマ・ザカートの缶詰クルバーン(インドネシア、2014年)



鳥の女

きば たかし 木場 貴俊 京都先端科学大学 准教授

ウブメがいた!!

この石像は、2019年の特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の図録によれば、空を飛翔できる女性の魔術師を象ったものという。鳥の頭を被り、背に翼が生えた異形を初めて見た瞬間、「あ、ウブメだ」と思った。

そう、わたしは長年ウブメという日本の化物を研究している。「産女」などと書くウブメは、出産で死んだ女性が化けたもので、夜中に赤子を抱いてあらわれ、通行人に子を抱くように強要し、その抱いた子は重くなるという。

だが、ウブメが鳥となんちの関係があるのだろうか。じつは、同じく出産で死んだ女性が化けた中国の怪鳥「姑獲鳥」とウブメが、江戸時代に同一視されたからである。ただし姑獲鳥は、子どもを攫う、また毒の血を衣服に付けて子どもを病気にするなど、ウブメと正反対の行動をする悪鳥である。出自は同じでも性質が異なる両者が混在する、その多面的なところがウブメの魅力である。

そんな姑獲鳥が日本に受容されていく過程で、ふたつの動きが起きる。ひとつは、ウブメを描くとき、白

い死装束に腰糞状の線描（出産時の出血を表現）を基本としているが、そこに鳥の足や翼などを付け加えて姑獲鳥にする場合がある。図の姑獲鳥は、推しの石像に造形に近い。

ウブメドリを探して

もうひとつは、日本で姑獲鳥を「発見」しようとした動きである。福岡藩主の黒田斉清による『本草啓蒙補遺』（19世紀前半成立）には、福岡の鞍手郡と志摩郡の村に毎年やって来る、頭が美女で、木の枝に引っかかるほど長い髪の小型の鳥、また並木定恒『妖怪門勝光傳』（1816年成立）でも、頭が女で体が鳶、乳房が長く垂れて髪をふり乱している鳥が、姑獲鳥に類するものとして紹介される。ただし、中国の姑獲鳥に人面の要素はない。姑獲鳥には「ウブメドリ」という和名がよく当てられて

いるが、上記の人面鳥は、姑獲鳥ではなくウブメドリという名前の方がしっくりくる。

人面鳥・半人半鳥は、迦陵頻伽、ハルピュエア、セイレーンなど世界中に見られる。石像の正体はよくわかっていないが、その得体の知れなさが多面的な化物のウブメにどこことなく通じているのかもしれない。



苗村松軒（なむらしょうけん）『御伽人形』（1705年刊、国文学研究資料館所蔵）より、射止められた姑獲鳥



◆ 推しコレポイント ◆

五本指の足から、鳥が女性に憑依（ひょうい）している様を彫っていて、いかにも「鳥の女」という感じでチャームアップです。左腕の貝殻のアクセサリーが、女性らしさをより強調するワンポイントになっています。

石像（鳥女）

標本番号 | H0031134
地域 | リベリア共和国
展示場 | 非公開

横田正臣の「古代への情熱」

ヨコタ博物館 (愛知県新城市)

なかむら まりえ
中村 真里絵

愛知淑徳大学 助教

山深い奥三河地方に行って驚いた。まさか日本のこんな山奥に、タイ東北部にある世界遺産、バンチェン遺跡から出土した土器がこんなにあるとは思わなかったからである。

それはヨコタ博物館のこと。横田正臣(一九二五〜二〇二

年)氏が一九六〇年代から、なんと三〇〇回以上も東南アジアへ渡航して収集したコレクションを展示する私設博物館である。クリーム色の地に赤褐色の彩文を施したバンチェン土器のほか、日本でも桃山時代から「宋胡祿」(すんころく)として知られてきたタイのサンカローク陶器、少数民族の衣装などもある。

横田正臣とはどのような人なのか、興味が湧く。彼は十代から働き始め、豊橋市でスーパーの経営者として成功した。

四〇歳を機に自分の人生を見つめなおして事業を整理し、東南アジアへ渡航するようになった。一九六九年、ラオスの首都ヴィエンチャンで得体のしれない人物から三点のバンチェン土器を購入した。帰国して研究者からお墨付きをもらおうと、これまで築いた財を元手にバンチェン土器をはじめとする考古資料の収集に情熱を注いだ。今日では考古遺跡からの出土品の売買は禁止されている。だが、一九七〇年代は古美術商がこぞって考古遺跡からの出土品を買い求めた。



ヨコタ博物館外観。庭に転がっている糞から、夜間に来館するシカの多さが窺われる(2022年)

その結果、アメリカやヨーロッパ、そして日本へとそれらは流出することになった。こうした現状を目の当たりにした正臣氏は、貴重な出土品が散逸するのを防ごうとした。同時に多くの人に見てもらおうと一九七四年に博物館まで建ててしまったのだ。

とはいえ、個人の趣味で集めたにしては、あまりにも膨大な数の資料である。彼を収集へと駆り立てたのは何だったのだろうか。残された手記や日記も少なく、その思いをくみ取ることは難しい。現在は息子が二代目館長として博物館を引き継いでいるが、博物館の今後や資料の行く末に頭を悩ませているわたしは正臣氏の遺志を汲んで、他の研究者らと共同で収集資料をデジタルアーカイブ化する事業を民博で始めた。

愛知県の静かな山のなかで東南アジアでの膨大な収集品を見ながら、故人の情熱に思いを馳せてみてはいかがだろうか。



上：正臣氏を収集へと駆り立てたバンチェン土器(2024年)

下：収蔵庫の内部。今年8月から資料整理を始めた(2024年)

自転車が刻むケニアのリズム

萩原 卓也

東洋大学 助教

自転車に乗る、というありふれたはずの移動も、ケニアでは新鮮である。眼の前に広がるサバンナに、道は無限大。「どこを走ってもいい」。ひとたび踏み出せば、まるで、大地も暑さも匂いも独り占めしているようだ。クルマの轍をたどるのもよし、けもの道

に誘われて進むのもよし。トゲトゲの植物や岩を避けながら、大地と一対一で会話するかのように、大地とリズムを刻みながら、転がっていく。

街なかのリズムは少し異なる。歩行者、リヤカー、バイク、日本よりもほんの少し(?) 威勢の良いクルマ、のっそりと動く大型トラック。路肩には石がにらみをきかせて、道路には穴が口を開けて待っている。牧畜民に連れられたウシやヤギの群れが道をふさいでいることもある。それらとおたがいにリズムを整えながら、自転車を走らせていく。そのリズムは一風変わった独特の魅力に満ちている。

ケニアで自転車はバイシケリとよばれ、それは鉄の黒い塊で、男性の乗り物で、貧しい人が乗るもので、ちょっとした移動や荷物の運搬に使うもの、というのが共通認識であった。近年では、環境意識や健康意識の

高まりにくわえ、余暇にお金をかける中間層の増加も手伝って、健康づくりや気分転換のために自転車にまたがる人が増えている。普段はナイロビのオフィスで働く若い女性が、休日にはスポーツタイプの自転車でサイクリングを楽しんでいる姿を見るのも、めずらしい光景ではなくなってきた。

スポーツタイプの自転車を新車で購入できる店舗は少なく、また値段も高いため、ケニアでは状態の良い中古車が人気である。そんな中で、日本からはるばる海を渡ってやってきた中古自転車たちをよく見かける。なぜそんなことがわかるのか。自転車のフレームに防犯登録シールが貼られたままになっているからだ。もしかしたらみなさんのむかしの相棒も、今ごろケニアで、あらたなリズムを刻んでいるかもしれない。



眼下に広がるサバンナ(ケニア マサイランド、2017年)



自転車のイベントには、老若男女、じつに多くの人が集まるようになった(ケニア ドゴト付近、2024年)

だって
調査だもの

ユニフォーム効果

稲澤 努
いながわ つとむ
尚絅学院大学 准教授



来てまだ三日なのに

二〇二四年七月、調査で博物館へ移動するため、台湾の田舎の港町でバスを待っていた。一日数本しか来ない田舎のバスなので、乗り遅れるとえらいことになる。そのため、少し早めに停留所に行って待っていた。目の前に立派な車が止まり、運転席のご婦人が声をかけてきた。「どこ行くの？ 頭城？」「えーと、(頭城の手前の) 蘭陽博物館です」「あら、じゃあ乗りなさいよ」というわけで、博物館まで送ってもらった。

この土地への訪問は二回目だが、初回は地区代表などへのあいさつだけの短い滞在だったので、知り合いは少ない。彼女はなぜわたしに声をかけたのか？ 「あなた、昨日、媽

祖(女神さま)の写真を撮っていたでしょ。わたしたちの廟の服を着て」。

そう、昨日はこの地区の媽祖廟と関係のある、地区外の廟の神々を連れてくる行事があった。わたしは、廟代表にもらった黄色い服を着て、神様を迎える一行についてまわったのだった。車内で話を聞くと、彼女は廟代表の弟の妻で、昨日の行事で写真を撮るわたしを見かけたのだという。同じ服を着ているだけで、来てまだ三日なのに地元の人のように見え、仲間として扱われる。「ユニフォーム」の効果はデカイ。

媽祖廟の服を着る筆者(右)(台湾 宜蘭県、2024年、廟の関係者撮影)



とりあえず現地になじむ

思い返せば約二〇年前、大学院生として初めて中国・広東省汕尾の漁村で長期調査を始めたばかりのときも、「現地の人と同じ格好」をしたことがある。当時、年配の女性たちを中心にした「拝神組」が、毎日のように廟に出かけ参拝と奉仕活動をしていた。そこに同行したら、お前もこれを着て拜め、という話になったのである。とりあえず仲間に入れたのもらったと思えば「なかなかいい感じの調査の始まりだ」と日本にいる指導教員に意気揚々とメールで報告した。そうしたら「なじむのはいい

けど、調査の目的はなじむことではないから」としっかりと研究の方向を定めるように釘をさされたことを思い出す。

ちなみに、現地になじんだと思っていたわたしが、その数日後、「拝神組」リーダーの老婆に「あなた、台湾人だったけ？ アメリカ人だったけ？」と聞かれてかなりびっくりした。そこで「日本人」と周りがフォローしてくれたが、「そうか。日本はここから車で何時間だい？」と聞きかえされ、まだまだ自分がまったく知らない世界観があることを思い知ったのだった。

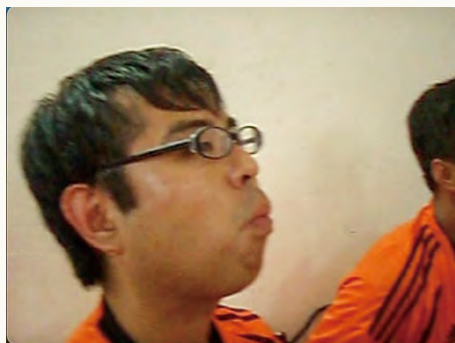
途中から「もう知らん」

こんなこともあった。同じ村のドラゴンボート祭りの打ち上げのときのことだ。わたしはボートには乗らなかったが、同じユニフォームを着て宴会に参加した。この宴は大変盛り上がり、酔っ払った地区幹部の青年にカメラをとりあげられ、好き勝手に動画を撮られた。動画は電池を食うので無駄遣いは「やめてほしいなあ」と思ったが、途中から「もう知らん」と聞き直った。同じ格好をしているせいか、みないつも以上にフレンドリーで、どんどん酒を注がれた。もちろん、それをことごとく飲み干すわたし……。

というわけで、この日の宴会の記録は、途中からほとんどない。残ったのは、盛り上がった、たくさん飲んだという記憶だけである。伝統文化と彼らの日常について聞きたかったのだが、まあ仕方ないのだ。だって調査だもの。



上: 廟で神に祈る拝神組
下: 拝神組と同じ格好をする筆者
(中国 広東省 汕尾、2006年、拝神組若手撮影)



右: 酔っ払った現地若手幹部に撮られた動画に映る筆者
左: 龍船レースを終え、宴会場にむかう漁村龍船隊
(漁村の若手幹部撮影)
(どちらも中国 広東省 汕尾、2010年)





行く国々で「肝だメシ」

キャサリン・バトラー カーディフ大学 准教授

わたしは子どものとき、すごく好き嫌いが多かった。しかし大人になるにつれ少しずつ食べられるものが増え、たぶん今では平均的な西洋人よりいろいろな食べ物を楽しんでいると思う。これまでわたしは文学研究者としていろいろな国を訪れいろいろな料理を食べてきた。初めて日本に来たのは50歳を超えてからなのだが、それまでに、各国で食にまつわる恥ずかしい思いも、誇らしい思いもしてきた。以来10年、イギリスの児童文学と日本文化の関係を研究するため、ほとんど毎年日本に通っているので、日本料理の種類にも文脈にもだんだん慣れてきた。

それぞれの国の料理は独特な味や食感を含んでいる。たまに、外国人観光客はビックリするような食べ物を半ば強引に供され、その反応を観察される。例えば、アイスランドでは強烈に臭う発酵サメ肉「ハウカット」を笑顔で食べなければならなかった。わたしも勇気がありそうな外国の友人にときどきマーマイトのサンドイッチを渡す。この酵母の副産物からできたとてもしょっぱいペーストをイギリスではパンに塗るのだが、究極に大好きか大嫌いかの反応を刺激させる能力をもつことで有名だ。

日本も同じだ。納豆を初めて食べたとき、日本の友達がじっとわたしを見ていることに気づいた。

ウニの握り寿司や生カキを食べたときも、観察されていることを強く意識した(わたしはウニが大好きだ!)。ウナギ屋で肝が入った汁を食べたとき、ひらめいた、「これが本当の『肝試し』だ!」。

わたしはほとんどの日本の食べ物を楽しめた。しかし、残っている謎がある。その食べ物を食べられなかった場合、日本の友達はがっかりしていたのか、密かに喜んでいたのか。わたしが「おいしい!」と言ったときの彼らの表情ははっきり読めなかったが、自分としてはたしかに得意な気持ちであった。食べ物は友情を支えるが、ときには争いも招くものなのかもしれない。人は意地っ張りでもあるので、食をめぐる展開される心理現象も面白い。



肝試しに臨むわたし(神奈川県小田原市、2023年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

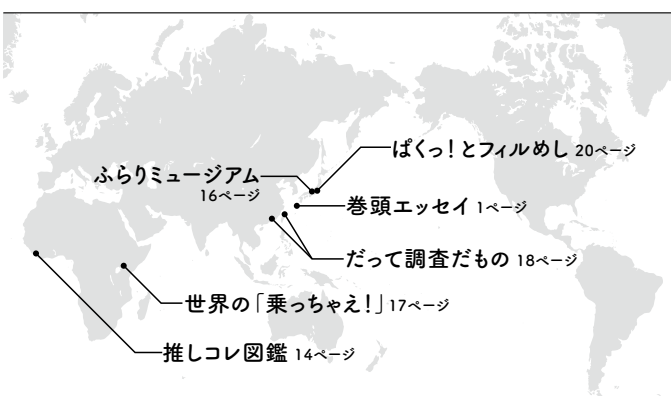
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

ベトナムの山間部に住む黒タイ族は十日ごとの昼と夕の食事前、祖霊をまつる家の祭壇に食事をお供えをする。その際、肉料理が不可欠。「ご先祖たちに日ごろの感謝を込めて」というのはタメエで、動物性タンパク質が不足しがちな農村の食生活で「たまには家族で肉でも食わにゃあ」というのがホンネの制度では、とわたしは疑っている。このように、お供えを信仰に根ざした霊的存在に対する贈与としてみずなら、そのタメエとホンネは大きく乖離しがちである。だが、「カミだの、あの世だの、祟りだの、ほんと?」って世になってもお供えがなくなるようすはない。なぜ?ということでも本特集。むしろお供えの本質は、絆などの感情をモノで可視化し

たいという、人ならでの欲求にあるのだろうか。もっといえば、人とは「お供え」する動物? だが、池谷和信さんのお供え発生論からすると、それもちがう??? わからないって楽しい。(樫永真佐夫)



次号の予告 2月号

特集「書なの? 画なの?」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

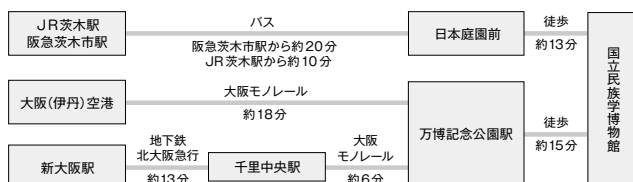
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>

